

懸賞論文（学生論文部門）審査結果について

序

平成 21 年度は、「みなさんはどのような街に住みたいですか」をテーマとして、昨年 7 月から「学生論文部門」の募集を開始（締め切り 9 月 30 日）し、大学院、大学あわせて 21 編の応募をいただきました。今回は残念ながら、最優秀賞、優秀賞に該当する論文がなく、佳作のみ 3 名を選定しましたので、概要を紹介します。

1. 審査結果

・応募結果：21 編

※ 分野別；理工系 17 名、文系 4 名

※ 学校別；大学院 8 名、大学 10 名、高専 3 名

・審査結果

最優秀賞：該当者なし 優秀賞：該当者なし

佳作：3 名

■佳作（賞金：3 万円相当の商品券）

・安藤 達也（東京大学大学院）「時間的蓄積の多い街～様々な年代の建物のある街にいろんな世代の人が集う～」

・石井 勇樹（木更津工業高等専門学校）「五感を刺激する街」

・長尾 絵里（上智大学）「どのような街に住みたいか ～地域住民主権型社会の構築と住民自治の促進～」

2. 審査方法と受賞論文

論文の審査は、当協会の広報委員会委員（11 名）が行いました。最初に各委員がそれぞれ全ての論文を評価し、全員の評価結果を集計・整理した上で、広報委員会での最終審査会を経て、表彰論文を決定しました。

今年度の募集テーマは昨年度のテーマ（「私たちは土木遺産を生み出せるのでしょうか」）を変更し、「みなさんはどのような街に住みたいですか」としました。

応募校の内訳は、大学院 3 校※、大学 7 校※高専 1 校※でした。地域別で見ると関東地区からの応募がほとんどで、東北、近畿、中国地区は各 1 校にとどまり、他の地区はなかったのが残念でした。※重複除く

このうち学科別では理科系の方（17 人）が最も多く、文化系の方からも 4 人の応募を頂きました。応募の動機については先生からの薦めが最も多く（7 名）、インターネット（4 名）、掲示板（3 名）といったものでした。

選ばれた佳作 3 編についての講評は次のとおりです。

■佳作受賞論文

○安藤 達也（東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻 修士 1 年） 「時間的蓄積の多い街 ～様々な年代の建物のある街にいろんな世代の人が集う～」

都市に点在する歴史的建造物を単に恒久的に保存するのではなく、その時間軸に一定の幅を持たせて更新するという案は独創的であり評価できます。

安藤氏は、多様性のある街こそ日本の街の特徴であるとの観点から、文京区本郷 6 丁目地区を例に挙げ、実際の建物の年代別分布図を独自に調べ、その構成要素を分析し、街の変遷の歴史と対比させることで、現存する様々な年代に作られた構造物そのものが歴史の生き証人と捉えて価値を見出しています。

そこに住む様々な年代の人々がそれらに馳せる思いを互いに共感できる姿こそが最良であり、時間軸を外れた建造物を更新することで街の活性化を促すという、街の有機的な発展を論じており、大変ユニークなアイデアです。

時間軸を外れても歴史的に価値ある建造物は存在します。これを如何に存続させながら快適な街を持続させていくといった二元性のある大きな枠組みへの検討が望める作品でした。更には実現するための施策に関する具体的な提言を期待します。

○石井 勇樹（木更津工業高等専門学校 環境都市工学科 5 年） 「五感を刺激する街」

住みたい街の像が非常に明確に、分かりやすく主張されており、住みたい街の条件を「五感」という切り口で論じている点で他にはない独創性を感じます。

石井氏は、普通の人たちが無意識のうちに心地よいと感じる街を、人間の持つ感覚「五感」が作用しているのではないかと捉えています。住みたい街の姿を、景観や制度設計という土木の専門的な切り口ではなく、一般の多くの方が共感できる「五感」という切り口から描いている点でユニークです。

「五感」とは、視覚であり、聴覚、嗅覚、味覚、触覚を

挙げっていますが、中でも、色彩効果やゆらぎを根拠として、自身の主張もしっかりと裏付けており、納得のできる論文構築を試みています。また、住みたい街ランキング上位の結果から独自に「味覚」という視点を引き出しています。

最後に私の住みたい街として北海道のある街の例を取り上げていますが、このユニークな「五感」を日本におけるあらゆる地域での街づくりへ活かすにはどうすべきか、さらに研究を進めて頂きたいと思える作品でした。

○長尾 絵理（上智大学経済学部経済学部）

「どのような街に住みたいか～地域住民主権型社会の構築と住民自治の促進～」

長尾絵理氏は、“地域住民の嗜好”の違いに目を向け、地域それぞれのニーズにあった政策を実施することが、地域の特徴を伸ばし、魅力ある街づくりにつながると主張している点が評価されます。

地域ニーズを把握する手法、特に自治意識の低い住民の声を引き出す方法として、①ユーザー登録さえしておけば、いつでもどこでも自由に参加できるインターネットを利用

した電子会議室や、②地域活動に参加すれば、行政サービスを優先的に利用できるポイントまたは商店街のクーポン券と交換できるポイントがたまる地域コミュニティ・ポイントを提案しています。

また、これらの地域の活性化を実現するために、女性や子供を中心とした街づくりを論じている点も共感できますが、更に高齢者の活用の視点があれば、なお良かったと思います。

最後に、筆者は魅力的な街とは「地域のために自分ができることは何かと考えながら生活している仲間が多く住む街」であると記していますが、これと冒頭の道州制との関係性について説明が不足しているように感じました。道州制ではなく、むしろ現在の地方都市の問題点・課題点として書き始めたら、わかりやすい論文に仕上がったと思います。

応募者の皆様には、貴重な夏休み期間中ながら、論文執筆に注力頂き、ここに厚くお礼申し上げます。

当協会では平成22年度も論文を募集する予定です。

力のある作品の応募をお待ちしていますので、奮って御参加ください。

(広報委員会)

